

# 中国旅行九日間

——とくに現代中国の宗教事情について——

藤 山 照 英

1985年4月26日。国鉄新大阪駅にてK先生と一緒に。ここよりタクシーで大阪空港に向かう。京都よりすでにT先生、K先生、H先生、A先生、H先生が到着している。16時50分、大阪空港発、CA（中国民航）922便。19時20分、上海空港着。ここでパスポートを提示して入国許可を得る。上海空港は新設で、simple and refresh である。空港へ向けて低空で海外線を過ぎると、夕暮ではあるが広大な農地と整然とした集落が望まれ、全体が黄土色の大地が広がる。大陸に来たという実感がする。1時間ほど休憩の後、北京に向う。上海発20時20分、北京着21時20分。もう夜である。空港には、中日友好協会の李代表、通訳の周さん、世話役の孫さんが迎えてくれる。空港内の貴賓室に通され、今回訪中の挨拶と相互の自己紹介を交す。税関も通らず特別扱いである。コーラとジュースが出る。マイクロ・バスで、北京市内の宿舎である友好賓館に向う。友好賓館はもと蒋介石の北京別荘であったということである。各自の部屋に荷物を置いてから別館食堂に一同集まり、夜食の接待をうける。時差は1時間早い。北京麦酒、アヒル卵、オカラ、胡瓜の酢づけ、ビーフ、ハム、ラーメン。ラーメンがとてもおいしい。中日友好協会から苑という人が来る。朝鮮族でも満鉄の駅員さんで、現在は友好協会の理事、T先生とは旧知らしい。食後各自の部屋に戻り、バスに入って就寝。空港には警備の兵隊が多く若干ものものしい感じがした。北京宿舎の

空気はきわめて静かで、落着いている。自分と自分が急に接近した感じとなる。時間感覚が変ってくる。時間の流れが日本とは違ってくるようだった。上海と北京の空港に着陸する際、耳の奥が痛くなったのは弱った。

4月27日。起床6時30分。外に出て写真を撮る。庭内の別棟に日本式料亭白雲亭があり、江戸前というのれんがかかっている。バーベキューとカタカナで書いた園亭もある。蒋介石の元別荘は、ただ今、ホテルに改装中のようなのである。7時45分、朝食。オカユ、マントウ、その他4品とリングが出る。8時30分、マイクロ・バスで出発。中国社会科学院に向かう。大きな建設中のビルであって、社会学研究所の研究者20数名がすでに待っていてくれる。訪問の挨拶と団員の紹介の後、K先生の日本の産業化と技術についてのスピーチ。その後約2時間の討議。中国社会科学院の研究者の年齢は若く、女性研究者も多い。所長は、雷先生であって、「当代中国宗教問題」の研究者であった。私の専攻を知ってか、自書「宗教概論」を頂く。中国社会科学院には数十の研究所があるが、この日集まっていたのは社会学研究者の方々で、その専攻分野は人類学、社会学理論、比較社会学、社会心理学、青少年心理学、犯罪学、犯罪心理学、生活と婚姻・家庭の研究、科学論、外国社会学研究、ソ連東欧社会学研究など多岐にわたっている。社会科学院には、中国社会科学院出版社があり、

社会学関係では「社会学研究」が出ている。社会学研究所の研究者数は、1984年までは55名であったが、1985年現在では91名となり、72名が研究者、他は研究員と雑誌編集員ということである。社会学研究所は、7つの研究室に分れており、①社会学理論研究室、②都市と農村の発展研究室、③生活様式と婚姻・家庭研究室、④社会心理学研究室、⑤外国社会学研究室、⑥青少年問題研究室、⑦「社会学研究」編集室である。中国社会科学院は各地の省市にある社会科学院の中心的存在であるが、以上の研究分野は全国的統一的なもので、とくに北京では①社会学の原理的研究、②経済改革と社会変化を独自の研究テーマとしているということである。研究室単位の共同研究は、現在15テーマであり、研究者個人の研究テーマは72にのぼるということであった。

さて、研究所長の雷先生から頂いた『宗教概論』は、社会主義国家中国の公式の宗教観に基づいて書かれている。広東・広西・湖南・湖北・河南 五省の人民出版社から出版されている「哲学及社会科学基礎知識シリーズ」のなかの一冊である。もちろん私は中国文を十分に読解することはできないが、序論には、マルクス＝レーニン主義および毛沢東思想に立脚して宗教と宗教問題について「観察と研究」をなしたものと述べている。第一章はしたがって、「什么是宗教？」(What is Religion?)である。人びとが、一般に宗教と考えるもの、例えば古刹寺院、教会、神秘的塑像、神が世界と人間を創造したという故事、苦海無辺の説教など、すなわち宗教建築、宗教芸術、宗教的史実、宗教教義などは、宗教に関係し宗教の表現形態であっても、それらは科学的意味での宗教ではないと論じ、厳密な意味での宗教というのは、一種の社会的意識形態であるとしている。以下、本書

の章題のみあげると、宗教の誕生と発展、中国にある諸宗教(仏教、キリスト教、イスラム教、道教)の歴史、宗教の社会的本質と社会的機能、社会主義段階での宗教問題、無産階級の宗教に対する態度と政策、宗教の消滅といった章からなっている。

現在の中国において、宗教(信仰)はどのような状況におかれているかは、今回の訪中の私の関心の一つであった。通訳の周さんにこの問題について聞いてみると、以前は多くの僧侶が追放されたり殺害されたり仏教施設が破壊されたりしたが、現在はそうではないという事であった。言うまでもなく、現在の中国は「四つの近代化」という目標を立てて、近代化路線を進んでいる。1965年から約10年にわたる文化大革命の激動期をのりこえ、四人組の追放、華国鋒の過渡的政権を経て、鄧小平の復活となり自由主義世界にも門戸を開く自由化・近代化の体制となっている。かつては、継続革命論に指導された紅衛兵などによって、「四旧打破」(旧思想・文化・風俗・習慣の打破)が叫ばれ、仏教・キリスト教・イスラム教、道教・ラマ教といった伝統的な宗教施設や宗教関係者は、恰好の攻撃目標になったことは言うまでもない。「孔林」と呼ばれる儒教の聖地も例外ではなかった。現在の中国は、国内の革命と破壊のあとの傷痕の反省に立って社会主義体制という大枠の中での自由主義原理をとり入れはじめている。それも農業・工業という産業技術部門にとどまらず、学問・芸術・生活様式の面にまでその方針があらわれてきているようである。中国社会の全体がこのような自由化の体制となってゆくとき、従来否定されてきた伝統的なものの復活もまたいろいろな面で見られるようになる。華国鋒の時期にも、著名寺院の復興や四散した僧侶たちが再

び寺院に還ってきたという新聞報道を読んだことがあったが、現在では北京や上海の大都會の著名宗教施設は一応修理復興が進んでいる。そして地方においても文革中に破壊された土地廟なども続々と再建されているということである。中国の政權も、宗教に対して政治的発言したり外国からの干渉がない限りきわめて寛容となっている。中国憲法第46条の〈公民は宗教を信仰する自由、および宗教を信仰せず無神論を宣伝する自由を有する〉という方針に立っているのであろう。最近、昨年(1985)の12月25日の新華社通信の報道によっても、北京をはじめ中国各地の教会で数千人のキリスト教徒がクリスマスを祝ったことが報ぜられた。(1985.12.25.朝日) 辻康吾氏の報告によれば、1980年当時で、中国の専門的宗教関係者は約6万人、その内訳は仏教僧・尼僧、ラマ僧が約2万7千人、道教の導師・道姑が約2千6百人、イスラム教専従者が約2万人、カトリック聖職者が約3千4百人、プロテスタント牧師などが約6千人となっていて、興味深いのは、社会主義体制下で各教信徒はむしろ増加してきたことで、イスラム教徒が800万人から1000万人、カトリック教徒が270万人から300万人、プロテスタントが70万人から300万人に増加したということである。(辻康吾著：「転換期の中国」岩波新書)

さて、旅行レポートにもどる。11時30分、社会科学院を辞して、宿舍の友好賓館に戻る。昼食メニュー、とりの油あげ、魚(あるいはふか)の炊いたもの、肉料理2種、胡瓜の酢のもの、スープ、白飯。北京ビールを飲む。13時30分、北京大学へ向けて出発。北京大学は、北京市の西北、空港に近いところであって相当時間がかかった。大学の応接室であろうか古風な建物で社会学系の先生たちの懇談。北京大学の教授の

先生方もすべて人民服を着ていて、街の人たちとほとんど区別がつかない。当方のK先生が、「日本の社会学の動向」と題してスピーチ。そのあと、中国の人口問題、社会学とマルクス主義といった問題に花が咲く。北京大学の案内書、カリキュラム、「社会学概論」、大学のパッチなど贈呈をうける。北京大学は自然科学系の学部とリベラル・アーツと社会科学の二学部制で、自然科学部は数学科、力学科、物理学科、技術物理学科、エレクトロニクス科、地球物理学科、化学科、生物学科、地質学科、地理学科、コンピューター理論とテクノロジー学科、心理学科の12学系から成っている。リベラル・アーツと社会科学部には、中国語中国文学科、史学科、考古学科、哲学科、経済学科、法学科、国際政治学科、図書館学科、社会学科、西洋言語西洋文学科、英語英文学科、東洋言語東洋文学科、ロシア語ロシア文学科の13学系と、マルクス＝レーニン主義の教育研究部門がある。その他に19の研究所をもっている。宗教については、南アジア研究所で、調査対象にあげられているということであった。

北京大学訪問の帰途は、王府井大街の中華料理店「東菜順風館」に向かい、中日友好協会の招待宴にのぞむ。料理はシャブシャブである。この招待宴の主人役は協会副会長の林林先生と昨日空港まで迎えに来てくれた李先生である。林林先生は、早稲田大学出身の文学者で、源氏物語、平家物語、川端康成の研究者であり、郭沫若の友人でもあった人である。

北京は大都會である。道路はとても広い。そこを無数の自転車に乗った人々が通っている。二輪連結のバスは、どれもこれもスシ詰めである。職場や工場が3交替制で休日も異なるのである。こうした人間の洪水になるということである。街路の真中にある安全地帯に〈安全島〉と書か

れているのが印象的である。

4月28日。7時起床。7時40分朝食。ヨーグルト、パン、コーヒー。8時30分出発。八達嶺万里の長城と明帝十三陵の観光に向かう。中国の観光地は、距離がある。目的地に着く前に、定陵の前のレストランで昼食。定陵の地下墓地に入る。深さは100メートルはあるだろう。観光地は中国人の観光客で一杯である。とくに軍服姿の兵隊さんの多さと彼らの若さに驚く。14時、八達嶺に上り、万里の長城からの景色をみる。お天気よく素晴らしい眺望。フィルム余すところ8枚。たちまち撮影終る。北京の宿舎への帰路、T先生とK先生の乗った車が接触事故をおこす。しかし、たいしたことはなかった。北京市に帰る帰途、北京の友誼商店に案内される。

4月29日。7時30分起床。7時45分朝食。10時出発。先ず天壇を訪れ、ついで観光のメインである故宮博物館に向かう。歴代中国皇帝の居城であった紫禁城の広大さに驚く。つぎからつぎへと巨大な建造物があらわれる。ここで皇帝の権力を誇示する壮大な儀礼が行なわれたであろう。アメリカ製スペクタクル映画で見たとおりである。故宮を辞して離宮であった頤和園に向かう。西大後の居室というところで、宮廷料理が出る。頤和園も各地からの観光客で一杯である。食堂でわれわれがあんまりのんびり構えているので、美人の中国人ウェイトレスがガチャガチャ片付けを始めたのが印象に残った。夕刻前日の中国側招待宴に対する返礼宴を、王府井の北京烤鴨店で催す。中日友好協会の李代表、苑理事、社会科学院の事務長と陵さん（経済学者で一昨年訪日中仏大社会学研究所で講演された。）が出席。自由に会話のできる気楽な宴席であった。問題の北京ダックは、料理の前に鴨の現物をみせるほど名物なのだけれども、料理の

一番最後に食卓に出るので、食いしん坊の私も十分食べられなかった。宿舎への帰途、通訳の周さんに特に頼んで天安門広場に案内してもらう。時間は15分間。とてつもない大きな広場である。しかし、「五一」(メーデー)の前々夜に当たっていたのだが人影も少なく、ところどころにある照明も暗い、時折ものすごいスピードで自動車が通りすぎる。広場の中央には、高さ40mの人民英雄記念碑が照明の中に浮び上がっている。中国ではメーデーは、完全に国定の祝日となっている。

4月30日。6時30分起床。7時30分朝食。直ちに北京空港に向かう。早朝の空港には、李理事が見送りに来て下さる。北京発9時50分、CA1227便。国内線なので飛行機はずっと小さい。11時30分、西安着。空港まで陝西省外事部の役人さんが二人迎えに来てくれている。西安滞在中の日程である「活動日程」を渡される。宿舎はソ連の造った人民大廈。宿舎へ向かう途中、街路の真中にある広告塔に文革のときのスローガンが消されずに残っていた。12時、昼食。14時、ホテルを出発。陝西省博物館見学。16時、西安市の南端に立つ大雁塔に参拝。西安は中国の古都だが、北京と比べるとずっと田舎で、のんびりした感じである。大雁塔にも大変な数の観光客（ほとんど中国人）が押しよせている。塔の半分位の高さに上ると西安市全域が望まれる。それより上は危険で上れないということであった。一同は大雁塔のご住持の永明法師という方に紹介された。小柄で農夫のようなお坊さんであった。

大雁塔にも多くの仏像がある。仏像の前には丸い枕のようなものが置かれていて、中国人はそこで膝を折って五体投地の拝礼をするのである。堂内一杯の観光者の中で中年の婦人が二人

昔ながらの礼拝をしていた。

現代の中国の宗教事情を考えるには、都市と地方の慣習の相違、党員とそうでない一般民衆との宗教に対する意識の相違を考えなければならぬと思う。現代の中国では、一般民衆の宗教信仰についてはきわめて寛大になっていることは先に述べた。そして多くの仏教寺院をはじめ伝統的な宗教施設は復興されているが、それは民族の文化的遺産としてであり、また観光資源としてである。日本の仏教の現状を観光仏教と評する人があるが、中国においても事情は同様である。そして、一般大衆も労働の合間の観光地として大半が仏教寺院を考えているのではないだろうか。各種の仏教団体や宗教団体の活動も、中国政府にとってみれば団体の国際交流を通じての友好促進が目的なのであろう。現在の中国は約12億の人口をかかえている。それを指導する共産党員は約4000万であるということである。文革のときに多数の知識人・文化人も殺害されたりしたので、社会の指導的勢力である知識人の不足に悩んでいる。中国のインテリ度は、党員100人のうち大卒が2、3人ということである。（浅川健次著：鄧小平新時代、有斐閣）社会革命は前衛によって長い準備期間と大衆動員によって達成されるのであろうが、政治権力の奪取によって新体制の社会となっても民族の伝統的な生活様式・慣習・諸観念のすべてが変わるわけでもないであろう。文化枠としての民族の根底にある伝統的なものは長く残存するのであろう。知識人と一般民衆の宗教に対する対応も、ちがったものである。北京や上海といった中国の大都市では、葬礼は故人の属していた居住委員会と職場委員会の双方において合同で行なわれ、一週間または十日間の服喪期間中に形見わけや財産分割が行なわれるという。遺骸は火葬にふされ、遺骨は公共の施設に

安置されるという。しかし、こうした現代風の葬儀は大都会の人びとに限られており、農村地方や地方都市では昔ながらの葬列を組んだ葬儀が行なわれているのではないかと思う。宗教専門職も、平生の職場を離れて宗教儀式としての葬儀は参加しているのではなかろうか。現代の中国はまた、50余の少数民族をかかえた多民族国家なので、宗教問題は少数民族対策問題でもある。社会科学院などでの宗教研究は、概ね、そうした少数民族のもつ習俗・伝統的生活様式の調査研究としてなされている。少数民族の政治的代表者についても、宗教信仰の自由は保障されていて、中心的民族である漢民族に関してのみ、共産党員には宗教の信仰は禁じられているということであった。

6時30分夕食。7時30分、泰山文化宮という西安の劇場で、民族舞踊劇『兵馬俑の魂』を観劇、内容は秦始皇帝の建国物語である。西安はシルク・ロードの入口、美人多しと聞く。

5月1日。西安の二日目。7時起床。7時30分朝食。8時30分、出発。乾陵観光に向かう。道のりは遠かった。中国の道路はかなり幅があり、両側にポプラかアカシアの並木が延々と続く。目的地に向かう途中、咸陽の街を通過する。この辺では民家はレンガ造りでなく土べいをめぐらした土の家が多い。赤い乾燥した土地がどこまでも続く。バスに揺られながら私の小学生の頃中国と日本は戦争をしていた事を想い出す。この風景は戦争中に写真や画報でみた風景なのである。

乾帝陵と今一つの未公開の泰山公陵墓を見学させてもらう。地下数十メートルの深さである。過去の盗掘の跡もある。冷蔵庫の中のように冷い。泰山公陵墓の食堂で昼食をとる。西安は地方都市ということもあって、食堂は相当不

潔であった。

乾帝陵見学の後、西安市の美術工芸専門店で案内される。5時、宿舍の人民大廈に戻る。6時、陝西省の副主席に当る人が、ホテルで歓迎宴を開いてくれる。西安のフル・コースは、中国に着いてから最高においしいものであった。夜、西安の市街にK先生、H先生と散歩に出る。西安の街も夜おそくまで商店は開いており、人びとの群れで一杯である。何の危険もなく群衆の中を遊泳できる。

5月2日。7時起床。7時30分、朝食。8時30分、マイクロ・バスで出発。今日の観光地は、午前華清池、午後兵馬俑博物館である。華清池は、楊貴妃が入浴したという中国の有名な温泉池である。また、張学良が蒋介石を和平会談後逮捕した西安事件の舞台でもある。われわれも同行二人ずつ僅かな時間湯につかる。ここも一杯の観光客である。入浴後、廻廊に腰かけて休んでいると、突然大声で言い争う声が聞えた。観光の中国人家族が何かで喧嘩をし始めたのである。中国の人の喧嘩をみたのはこれが始めである。主人らしい男がお互いに背をそらし胸を張って口上を述べるような調子で喧嘩している。警戒中の若い警官が二人やって来たが、ニヤッと笑って放とけという表情をして直ぐに立去った。13時、兵馬俑博物館につく。学校の運動場がすっぽり入ってしまうような大きな建物の中に兵馬俑軍団が発掘されたままの姿で並んでいる。写真撮影は禁止である。俑の数の多さもさることながら、それぞれの人形が個性的な顔をしていて写実的なことに驚く。博物館の周辺には、布を屋根にした住民の干店が一杯ならんでいて、観光客に民芸品などを売りつけている。この辺の中国の人びとは北京の市民たちと違ってずっと貧しく地方的であった。ラク

ダが数匹いて、少年に1元渡すと乗せてくれる。A先生、K先生、K先生もラクダの背にまたがって得意そうである。秦始皇帝陵も、実に広大なものであった。陵への大きな道路わきには、いくつもの石造の人形がたっている。16時人民ホテルに戻る。17時ホテル出発。18時25分西安空港から上海へ向けて出発。CA5202便。上海着、20時30分。もう夜である。空港で待つこと数十分、上海社会科学院の研究者一人と政治局の一人が、迎えに来てくれる。宿舍に直行。宿舍のホテルは錦江飯店である。建物の外に出て、ラーメンを食べビールをのむ。西安に比べると上海は近代的大都市である。

5月3日。起床7時。朝食7時30分。食堂は錦江飯店11階である。錦江飯店はヨーロッパ・スタイルのホテル。ルームも広く置かれている調度品も素晴らしい。大きなミラーの前のお湯もふんだんに出る。ヨーロッパ人、アメリカ人、インド人など、宿泊者は人種の見本市である。8時30分、上海社会科学院に向かう。この科学院は、女学校の建物をそのまま利用しているそうである。9時より11時まで、自己紹介の後、雑多な懇談をする。仏教大学学術訪中団という名称のせいだろうか、上海の社会科学院側の研究者は、宗教・仏教の研究者ばかりであり、しかも、古代・近代中国仏教史、文化人類学の研究者であった。話題は現代の宗教問題について集中した。なかに、60歳前後の方で高振農と名乗られた研究者が居られた。今回のわれわれの訪問に対する科学院側の世話人らしく、前日夜おそく空港まで迎えに来て下さり、出発のときは見送って下さった方である。懇談のとき、中国百科事典に仏教の項目に執筆したと話されていた。次の日、バスの中で私に論文を下さったので、ここに紹介しておく。高先生は、清代・

近代仏教史の研究者らしく、頂いた論文の題目をみると、椋仁山、熊十力、欧阳竟元、呂澂などの史実研究である。中国近代化の中で仏教（者）の果たした役割などを研究されているのであろうか。中国社会科学院の雷先生、上海での高先生など、私の専攻を知って著述を下さったので、専攻が近いということは大変有難いことだと思う。

12時。錦江飯店に戻って昼食。13時30分、出発。「文明単位」と称される住民の自治組織を見学する。静安区にある居民委員会であって林立するアパート群の中にあった。日本で言えば町内会事務所といったところである。例のごとく花茶の接待をうけた。ここでは自治会の役員さんは年輩の方ばかりである。大変不躰けな質問であったが、葬式はどのようにするかと聞いてみたら、内容は十分わからなかったけれども、職場関係と地域関係の合同で最後のお別れをするということであった。

居民委員会を辞してから、上海の禅寺玉仏寺を拝観する。玉仏というのは、玉で造られた釈迦像で座像と臥像であった。材質のためか、女性的でなまめかしい仏さまであった。玉仏寺には、仏教学院も併設されていて、多数の中国禅僧がいた。先日西安大雁塔で観た仏像もそうであるが、中国寺院の仏像は、大衆信仰に根差した現世利益的信仰対象のような感じが強い。崇高とか芸術的とかいう表現にはほど遠いような感じがする。玉仏寺の訪問者も、現在はほとんど観光客である。仏教学院も他国からの訪問者との友好促進の観光資源として機能しているようである。一般大衆が旧習によってであれ、現世利益の祈りを捧げていても、現在の中国政府はあまりやかましく言わなくなっている。

上海の友誼商店に案内される。友誼商店は各地にあるが、北京の店が一番豪華である。入口

に見張番がいて、外国人と華僑は入れるが一般の中国人は追い返されている。店員もまたここは外国であるという意識をもっていて、人民幣を出すと断られる。K先生とT先生とで、南京東路・西路を歩く、街路も商店・百貨店も群衆で溢れている。6時30分、上海対外友好協会の招待宴にのぞむ。場所は黄浦江の河べりに立つ上海大廈の上層階であった。このホテルは古いのか再建築中かわからないが、エレベータを乗り継ぎして部屋に案内された。通路の照明も暗く、足許も危い。招待宴はこれで三回目。上海での主人は、友好協会の馬先生であった。眼鏡をかけ長身のトルコ系の人ということである。21時、宿舎の錦江飯店にもどる。われわれの十日間の中国旅行に同行して世話をしてくれた通訳の周さんに、感謝の意をこめて朱の花瓶を贈呈する。われわれの「当代中国初体験の旅」は終わった。明日は、上海発 CA915 便で日本に戻る。通訳の周さんには、船でやってくる観光客の世話という新しい仕事が続いているということである。

最後に概括的な現在中国の印象を書く。中国に行って驚くことは、先ずその領土の広さと人間の夥さである。大都市の大街での自転車の洪水、観光地には休暇中の中国人民衆が溢れている。兵隊さんの多いのにも驚く。しかし日本の都市の雑踏とはどこか違う。日本の場合は、人間はカラフルで個性的ではあるが、バラバラで無方向な群衆の感じであるが、中国では、不思議な安定感をもった人びとである。民衆の生活水準は低いかもしれないが、生活の活力と満足感が高いのかもしれない。自転車とミシンと時計という「三つの廻るもの」がようやく普及した段階だという。自動車や各種電化製品などは、高嶺の花であろう。観光地で中国製カメラ

をいじくる青年は得意そうであった。街で見かけた女性にも、ハイヒール姿もあるしカラフルなブラウスを着た人もいた。生活のエンジョイにおいて、中国人に競争心がないということが、あの不思議な安定感の理由であろうか。北京ではレンガ造りの旧家屋がどんどん壊されて、あちこちにレンガの山が見られた。他方、労働者のための高層鉄筋アパートが建設中である。都市計画がただ今進行中である。人間の都市集中とその制限、あるいは人口の地方分散ということも行政府の頭の痛いところだという。近代化は、先ず軍事や基幹産業の近代化であるが、根底には生活水準の向上という共通目標がある。外国からの科学技術の導入、外貨獲得もそのための手段であろう。中国が自由主義体制に門戸を開いたのも、イデオロギー問題を抜きにして、国家的規模で生活水準を向上させるためである。しかしまた、自由化のゆきすぎから各種の経済犯や一部特権層の富裕化が見られるという。皮ジャンパーを着て大型バイクを乗り廻す青年は、党幹部や政府要人の子弟だという。しかし自由化の弊害が現われているとしても、現在の中国がある方向に走り出していることは事実である。今一つ印象に残るのは、社会的に男女差別が見られないことである。同一労働同一賃金の原則が徹底していて、男女同権・平等意識は、日本よりも高いのではないだろう

か。しかしまた、通訳の周さんがふともらしたように、女性が強くなることが中国の男性にとって脅威でもあるらしい。ともあれ、中国は革命の激動期を過ぎて、ほう大な諸問題をかかえて新しい原則の社会主義社会建設の実験中である。昨年8月、日本政府は首相はじめ関係の靖国公式参拝を挙行政した。神道的礼拝形式をとらず、いわゆる宗教色を薄めての公式参拝であった。この日本政府の行為に対して、中国では天安門前で北京大学の学生による抗議デモが行なわれ、各地の壁新聞に日本の軍国主義復活を非難する文章が書かれたのである。中国の政府高官がこうした中国学生の動きに理解を示す発言を示すや、日本政府は中国に対して弁明をしたり、秋の例大祭の首相の参拝は中止ということになった。靖国神社公式参拝という政治的あるいは宗教的行為は、単なる日本だけの国内問題ではなくして、国際的な波紋を呼ぶ問題でもあったのである。現代中国の宗教事情について、僅かな滞在期間では何ほどのことも知ることでもできなかったけれども、宗教と政治の問題は、楯の両面のごとく表裏の關係にあり、信教の自由や政教分離といった原則は、近代社会にとっては必須の要件であることを認識せざるを得なかった。現在の中国は、日本のわれわれにとってそんなに遠い国ではない。